

Weak type の interpolation theorems

東北大理 猪狩 惺

§ 1. 序

この目的は二つの空間 $L_n^{(p, \lambda)}(\Omega)$ と $H^p(\mathbb{R}^{n+1})$ に関する補間定理を述べることである。

現在では、作用素の補間定理は補間空間の構成という立場から論ぜられることが多い。それらのうちよく知られているものとして、例之は Calderón [1], Lions [8] および Lions - Peetre [9], Peetre [10] などの方法がある。

前者は, Riesz - Thorin の補間定理を Calderón - Zygmund が Phragmén - Lindelöf の定理を用いて透明に証明しているが, その方法を活かしたもので所謂複素関数論的方法によるものといえる。一方, 後者二つの中には関数を具合のよい二つの部分に分解するという方法がみられる。このように考へ方は Marcinkiewicz の補間定理の証明の中にもみることができ

そこでは複素関数論的方法はとらえておこう。

始めに述べた二つの空間 $L_k^{(p, \lambda)}$, H^p に対しては, Riesz-Thorin と Marcinkiewicz のと類似した補間定理がかりた。そしてそれらと上における構成された補間空間との関係は, 例之は Kree [7], Spanne [12] などでおかれている。しかしそれらが一般的有空間の一つの例にすぎないか否か, あるいはそれらを含ぶより一般的有空間の構成はどうか, ということに思われる。

§ 2. 空間 $L_k^{(p, \lambda)}(\Omega)$.

空間 $L_k^{(p, \lambda)}(\Omega)$ は John-Nirenberg [6] と Campanato [2], [3] などによって述べられている。更に Spanne [12] Stampacchia [13], [14] に従ってそれを述べる。

Q は常に n 次元ユークリッド空間 R^n の各辺が座標軸と平行な立方体を表わすものとする。 Ω は R^n の連結開集合で, 中心が Ω に含まれ $\text{diam}(Q) < 2 \text{diam}(\Omega)$ なるすべての Q に対して

$$|\Omega \cap Q| / |Q| \geq \delta > 0$$

がなりたつものとする, ここに δ は Q に無関係な定数である。 P_k を n 変数, 次数 $\leq k$ なる多項式全体とする。

定義. $1 \leq p < \infty$, $-\infty < \lambda < \infty$, $k \geq 0$ は整数とする。

$\mathcal{L}_k^{(p, \lambda)}(\Omega) = \mathcal{L}_k^{(p, \lambda)}$ は次のように Ω 上の局所可積分関数 u の集合である;

$$[u]_{\mathcal{L}} = \sup_{\Omega} \left\{ \frac{1}{|\Omega|^\lambda} \inf_{P \in \mathcal{P}_k} \int_{\Omega \cap \Omega} |u - P|^p dx \right\}^{1/p} < \infty,$$

ここで Ω は中心が Ω に含まれ $\text{diam}(\Omega) < 2 \text{diam}(\Omega)$ である。

$[u]_{\mathcal{L}}$ の定義で右項式として特別なものをとることが出来る; 立方体 Ω に対して $\{\varphi_j\} \in \mathcal{P}_k$ の内積 $(f, g) = \int_{\Omega \cap \Omega} f \bar{g} dx$ に関する正規直交基とする, 但し便宜上 φ_0 は定数関数としておく, そのとき

$$P(\Omega)u = P_k(\Omega)u = \sum_j (u, \varphi_j) \varphi_j$$

とあくと

$$\|P_k(\Omega)u\|_{L^p(\Omega \cap \Omega)} \leq C \|u\|_{L^p(\Omega \cap \Omega)}$$

となる, C は u, Ω に無関係な定数である. 従って

$$\begin{aligned} \inf_{P \in \mathcal{P}_k} \|u - P\|_{L^p(\Omega \cap \Omega)} &\leq \|u - P(\Omega)u\|_{L^p(\Omega \cap \Omega)} \\ &\leq (1+C) \inf_{P \in \mathcal{P}_k} \|u - P\|_{L^p(\Omega \cap \Omega)}. \end{aligned}$$

ゆえに $[u]_{\mathcal{L}}$ の定義で P は $P(\Omega)u$ とおきかえてもよい。

定義. $C^{(k)}(\Omega)$ は $\bar{\Omega}$ 上 $r \leq k$ 次の連続な導関数をもつ関数 u の集合とする. $C^{(k, \alpha)}(\Omega)$, $0 < \alpha \leq 1$, は $u \in C^{(k)}$

で

$$[u]_C = \sum_{|l|=k} \sup_{x, y \in \Omega} \frac{|D^l u(x) - D^l u(y)|}{|x - y|^\alpha} < \infty$$

なる u の集合とする.

定理. $1 \leq p < \infty$, $k \geq 0$ は整数, $\lambda \geq 0$, $\alpha = (\lambda - n)/p - k$ とする.

$$(i) \quad \alpha > 1 \text{ ならば } \mathcal{L}_R^{(p, \lambda)} = \mathcal{P}_R.$$

$$(ii) \quad 1 \geq \alpha > 0 \text{ ならば } \mathcal{L}_R^{(p, \lambda)} = C^{(R, \alpha)}$$

$$(iii) \quad 0 > \alpha \text{ ならば 整数 } k, \alpha + k - 1 < k, \text{ に対して}$$

$$\mathcal{L}_R^{(p, \lambda)} \cap L^p(\Omega) = \mathcal{L}_R^{(p, \lambda)} \cap L^p(\Omega).$$

$$(iv) \quad \mathcal{L}_R^{(p, 0)} = L^p(\Omega) + \mathcal{P}_R.$$

§ 3. 空間 $E_k(\Omega)$.

$k \geq 0$ を整数とすると, すべて $p \geq 1$ に対して

$$\mathcal{L}_R^{(1, n+k)}(\Omega) = \mathcal{L}_R^{(p, n+pk)}(\Omega)$$

であることは Campanato [3] は示した. 従って $\mathcal{L}_R^{(\infty, \infty)}$

に代るものとして $E_k(\Omega)$ を $\mathcal{L}_R^{(1, n+k)}(\Omega)$ として定義す

る. E_k の半ノルム $[\]_E$ は $[\]_{\mathcal{L}_R^{(1, n+k)}}$ と与える.

定理. $u \in L^1_{loc}(\Omega)$ とするとき次の条件は同値である.

$$(i) \quad [u]_{\mathcal{L}_R^{(1, n+k)}} < \infty,$$

$$(ii) \quad [u]_{\mathcal{L}_R^{(p, n+pk)}} \leq \text{constant for all } p \geq 1$$

(iii) ある $\beta > 0$ に対して

$$\sup_{\Theta} \frac{1}{|\Theta|} \int_{\Theta \cap \Omega} [e^{\beta |u - P_k(\Theta)u| / |\Theta|^{\frac{k}{n}}} - 1] dx < \infty,$$

(iv) ある $\beta' > 0$ に対して

$$\sup_{\Theta} \sup_{\sigma > 0} \frac{1}{|\Theta|} e^{\beta' \sigma / |\Theta|^{\frac{k}{n}}} \text{meas} \{x \in \Theta \cap \Omega : |u - P_k(\Theta)u| > \sigma\} < \infty.$$

(iii) \rightarrow (ii), (iii) \rightarrow (iv) は明らか, (iv) \rightarrow (ii) は容易に示される. $k \geq 1$ のとき (i) \rightarrow (ii) であることは Campanato [3] にある. 従ってこのときは (ii) \rightarrow (iii) は容易に示される. $k = 0$ のとき (i) \rightarrow (iv) であることは John - Nirenberg [6] にある.

§ 4. 空間 $\mathcal{N}_k^{(p,\lambda)}(\Omega)$ と $\mathcal{M}_k^{(p,\lambda)}(\Omega)$.

Ω は互いに素な中心が Ω にあり $\text{diam}(\Theta) < 2 \text{diam}(\Omega)$ であるような有限個の互いに素な立方体からなる集合の族とする.

定義 $1 \leq p \leq \infty$, $-\infty < \lambda < \infty$, $k \geq 0$ を整数とする.

$\mathcal{N}_k^{(p,\lambda)}(\Omega) = \mathcal{M}_k^{(p,\lambda)}$ は次の条件をみたす Ω 上の可積分な関数 u の集合である:

$$[u]_{\mathcal{N}} = \sup_{\{\Theta_j\} \in \mathcal{Q}} \left\{ \sum_j \left(\frac{1}{|\Theta_j|^{\frac{k}{n}}} \int_{\Theta_j \cap \Omega} |u - P_k(\Theta)u| dx \right)^p |\Theta_j| \right\}^{1/p} < \infty.$$

容易にわかるように

$$E_k(\Omega) = L_k^{(C, n+k)}(\Omega) = N_k^{(C, n+k)}(\Omega).$$

定義. $1 \leq p < \infty$, $-\infty < \lambda < \infty$, $k \geq 0$ を整数とする.

$\mathcal{M}_k^{(p, \lambda)}(\Omega) = \mathcal{M}_k^{(p, \lambda)}$ は次の条件をみたす Ω 上の可測関数 u の集合である:

$$[u]_{\mathcal{M}_k^{(p, \lambda)}} = \sup_{\Omega} \sup_{\sigma > 0} \sigma \left[\frac{1}{|\Omega|^\lambda} \text{meas} \{x \in \Omega \cap \Omega : |u - E_k(\Omega)u| > \sigma\} \right]^{1/p}$$

$< \infty$.

Kalmogorov の不等式から明らかなる

$$[u]_{\mathcal{M}_k^{(p, \lambda)}(\Omega)} \leq [u]_{L_k^{(p, \lambda)}(\Omega)}$$

である. 更に次のように関係が成り立つ.

定理. $1 < p < \infty$, $k \geq 0$ を整数, $\lambda \geq n$ とすれば,

$$[u]_{\mathcal{M}_k^{(p, \lambda-n)}(\Omega)} \leq C [u]_{\mathcal{M}_k^{(p, \lambda)}(\Omega)},$$

ここで C は u に無関係な定数である.

証明は次に示す補助定理を用いて John-Nirenberg [6] の論法を適用すればよい.

補助定理. $u \in L^1(Q \cap \Omega)$, Q の中心は Ω に含まれ
 $\text{diam}(Q) < 2 \text{diam}(\Omega)$,

$$s \geq \frac{1}{|\Omega|} \int_{\Omega, \Omega} |u - P_k(\Omega) u| dx$$

とする。このとき Ω に含まれる中心が互に異なる半径 δ の可算個の Ω_j と、 δ , m だけに関係する定数 κ が存在して次の δ が条件を満たす。

$$(i) \quad |u(x) - P_k(\Omega) u| \leq s \quad \text{a. e. in } \Omega, \Omega \setminus \bigcup \Omega_j$$

$$(ii) \quad |P_k(\Omega_j) u - P_k(\Omega) u| \leq \kappa s \quad \text{in } \Omega_j$$

$$(iii) \quad \sum_{j=1}^{\infty} |\Omega_j| \leq \kappa s^{-1} \int_{\Omega, \Omega} |u - P_k(\Omega) u| dx.$$

§ 5. 補内定理.

以上述べた空間 Λ の写像に対する補内定理を主に Stampacchia [13], [14] に従って述べる。これは古くから知られた $Riesz - Thonin$, Marcinkiewicz の定理から極く簡単に導かれるものである。しかし結果は自明であるばかりは有効である。

定理 1. $1 \leq p_i, q_i \leq \infty, -\infty < \lambda_i < \infty$ ($i = 0, 1$),

$k \geq 0$ の整数とする。 $0 < \theta < 1$ に対して

$$1/p_\theta = (1-\theta)/p_0 + \theta/p_1, \quad 1/q_\theta = (1-\theta)/q_0 + \theta/q_1,$$

$$\lambda_\theta = (1-\theta)\lambda_0 + \theta\lambda_1$$

と置く。

\mathbb{T} が $L^{p_i}(M, \mathcal{M}, \mu)$ から $\mathcal{L}_k^{(p_i, \lambda_i)}(\Omega)$ への線型写像として、 $\forall M_i (i=0, 1)$ に対して、 τ が、
 $[\mathbb{T}u]_{\mathcal{L}_k^{(p_i, \lambda_i)}} \leq M_i \|u\|_{p_i}$ が成り立つ、 $L^{p_0}(M, \mathcal{M}, \mu)$ から $\mathcal{L}_k^{(p_0, \lambda_0)}(\Omega)$ の写像として、 $\forall C \leq C M_0^{1-p_0} M_1^{p_0}$ となる、
 C は \mathbb{T} 、 u に無関係な定数である。

証明. $J_Q u = u - P_k(Q)u$ とおけば、 $J_Q \mathbb{T} : L^{p_i} \rightarrow L^{p_i}(Q \cap \Omega, |Q|^{-\frac{\lambda_i}{n}} dx)$ のノルムは $C_i M_i$ であることを示す。
 従って、測度の変化も含めた Riesz-Thorin の定理 (Stein-Weiss [15] 参照) を適用して Q に関する \sup をとれば、
 求める式が得られる。

同様にして Marcinkiewicz の定理から次の定理が導かれる。

定理 2. $1 \leq p_i \leq p_i' < \infty$, $p_0 \neq p_1$, $p_0 \neq p_1$ とする。 λ_i, k, p_0, p_0' は前定理と同様とする。

$\mathbb{T} \in L^{p_i}(M, \mathcal{M}, \mu)$ から $\mathcal{M}_k^{(p_i, \lambda_i)}(\Omega)$ への線型写像¹⁾として、 $\forall M_i (i=0, 1)$ に対して、 \mathbb{T} は L^{p_0} から $\mathcal{L}_k^{(p_0, \lambda_0)}$ への写像として、 $\forall C \leq C M_0^{1-p_0} M_1^{p_0}$ となる。

定理 3. $p_i, p_i', p_0, p_0', \lambda_i, \lambda_0, k$ は定理 1 と同様とする。
 $\mathbb{T} \in L^{p_i}(M, \mathcal{M}, \mu)$ から $\mathcal{M}_k^{(p_i, \lambda_i)}(\Omega)$ への線型写像として、 $\forall M_i$ であるとする ($i=0, 1$)。このとき $\mathbb{T} : L^{p_0}$

¹⁾ \mathbb{T} は線型よりゆるい条件が必要かえてよい。

$\rightarrow \mathcal{N}_k^{(\rho_0, \lambda_0)}$ のノルム $\leq M_0^{-\rho} M_1^{\rho}$ である。

証明. $\{Q_j\} \in \mathcal{Q}$ とする. 複素数 z , $0 \leq \operatorname{Re} z \leq 1$, k に対して $S^z : \mathcal{N}_k^{(p, \lambda)}(\Omega) \rightarrow L^1(L(\Omega); (\mathbb{Z}^+, |Q_j| dj))$

$$S^z v(j) = \frac{1}{|Q_j|^{\frac{\lambda z}{n}}} [v(\cdot) - P_k(Q_j)v(\cdot)] \chi_{Q_j}(\cdot)$$

に $\delta > 0$ を定義すれば,

$$S^z T : L^p(M, \mathcal{M}, \mu) \rightarrow L^z(L(\Omega); (\mathbb{Z}^+, |Q_j| dj))$$

は解析的線型, z に対して $\operatorname{Re} z = z$ ($z = 0, 1$) のとき, $\| \cdot \| \leq M_z$ である. M_z への Stein の補間定理 (Calderón [1]) に $\delta > 0$ を求め評価する.

定理 4. $p_i, \rho_i, p_0, \rho_0, \lambda_i, \lambda_0, k$ は定理 2 と同様とする. $T \in L^p(M, \mathcal{M}, \mu)$ から $\mathcal{N}_k^{(\rho_i, \lambda_i)}(\Omega)$ のノルム M_i による線型写像とすれば, $T : L^{p_0}(M, \mathcal{M}, \mu) \rightarrow \mathcal{L}_k^{(\rho_0, \lambda_0 - \gamma)}(\Omega)$ のノルム $\leq C M_0^{-\rho_0} M_1^{\rho_0}$ である.

証明は δ の定理と定理 2 を用いると $\delta \parallel$.

定理 4 は $\rho_i = \infty$ であるとしても \parallel . 実際上の定理は $\mathcal{N}_k^{(\rho_i, \lambda_i)}$ と $\mathcal{N}_k^{(\infty, n+k)} = E_k$ と $\mathcal{M}_k^{(\rho_0, \lambda_0)}$ であるから之で δ を取り戻す.

以上 4. の定理は $L^p(M, \mathcal{M}, \mu)$ の一般の補間空間であるから之でも \parallel . しかし特別な場合を除いて空間 $\mathcal{L}_k^{(p, \lambda)}$ や $\mathcal{N}_k^{(p, \lambda)}$ 自体であるから之でも \parallel が示すか明らかでないから \parallel .

である (Stein - Zygmund [16] 参照).

§ 6. 応用例

典型的な応用例として Riesz ポテンシャル 及び Calderón-Zygmund のタイプの特異積分を考慮してみよう.

a は \mathbb{R}^n 上の可測関数で, $1 \leq r \leq \infty$ に対して

$$\left(\int_{|y| \geq At} |a(x-y) - a(-y)|^r dy \right)^{1/r} \leq A, \quad |x| \leq t$$

とす. $\mathbb{T}u = u * a$ とおく.

$1/p_0 - 1/q_0 = 1/r'$, $1/r + 1/r' = 1$, $p_0 < r'$ とす.

もし $\mathbb{T}: L^{p_0} \rightarrow L^{q_0}$ が有界ならば, すると $1/p - 1/q = 1/r'$, $1 < p$, $q < \infty$ に対して $\mathbb{T}: L^p \rightarrow L^q$ は有界である.

これを証明するには, $\mathbb{T}: L^{r'}(\mathbb{R}^n) \rightarrow \mathcal{N}_0^{(\infty, n)}(\mathbb{R}^n) = E_0(\mathbb{R}^n) = \mathcal{L}_0^{(1, n)}(\mathbb{R}^n) = \mathcal{L}_0^{(q_0, n)}(\mathbb{R}^n)$ が有界であることを示せばよい. 仮定から, $\mathbb{T}: L^{p_0}(\mathbb{R}^n) \rightarrow L^{q_0}(\mathbb{R}^n) \subset \mathcal{L}_0^{(q_0, 0)}(\mathbb{R}^n) \subset \mathcal{N}_0^{(q_0, n)}(\mathbb{R}^n)$ は有界だから定理4を用いて示すことができる.

実際, $u = u_0 + u_1$, $u_0 = u$ ($|u| < At$), $= 0$ ($|u| \geq At$) とおくと

$$\|\mathbb{T}u_0\|_{q_0} \leq C \|u_0\|_{p_0} \leq C' t^{n/q_0} \|u\|_{r'}.$$

$$|\mathbb{T}u(x) - \mathbb{T}u(0)| \leq \left(\int_{|y| \geq At} |a(x-y) - a(-y)|^2 dy \right)^{1/2} \|u\|_{L^2},$$

ゆえに, $c = \mathbb{T}u(0)$ とおくと

$$\left(\int_{|x| \leq t} |\mathbb{T}u(x) - c|^{2_0} dx \right)^{1/2_0} \leq C t^{n/2_0} \|u\|_{L^2}.$$

従って, $\|\mathbb{T}u - c\|_{L^{2_0}(Q)} \leq C |Q|^{1/2_0} \|u\|_{L^2}$ が中心 0 の立方体 Q に対して成り立つ。これは平行移動によって t 以下の立方体 Q に対して成り立つから,

$$\|\mathbb{T}u\|_{L^{2_0}(Q_{t_0, n})} \leq C \|u\|_{L^2(\mathbb{R}^n)}.$$

かえりだす。

以上への応用例として, 定理 1 の $\mathbb{T}: L^{p_i} \rightarrow C^{(k_i, d_i)}$ は有界線型写像に対して適用されり。

§7. 空間 H^p に対する補内定理.

定義. $H^p(U)$, $p > 0$, U は n 次元単位面の内部で解析的関数 $f(z)$ の集合である;

$$\|f\|_p = \sup_{0 < r < 1} \left(\frac{1}{2\pi} \int_{-\pi}^{\pi} |f(re^{i\theta})|^p d\theta \right)^{1/p} < \infty.$$

この空間を半平面上の関数で考えたものは $H^p(\mathbb{R}^{n+1})$ である。
 $f(x, y) \in H^p(\mathbb{R}^{n+1})$, $x \in \mathbb{R}^n$, $y > 0$, とは $n+1$

1 個の調和関数系 (f_0, f_1, \dots, f_n) で次の条件をみたすものという:

$$\frac{\partial f_0}{\partial y} + \sum_{i=1}^n \frac{\partial f_i}{\partial x_i} = 0, \quad \frac{\partial f_0}{\partial x_i} = \frac{\partial f_i}{\partial y}$$

$$\frac{\partial f_j}{\partial x_i} = \frac{\partial f_i}{\partial x_j}, \quad i, j = 1, \dots, n,$$

$$\|f\|_p = \sup_{y>0} \left(\int_{\mathbb{R}^n} \left[\sum_{i=0}^n |f_i(x, y)|^2 \right]^{p/2} dx \right)^{1/p} < \infty$$

ヒルベルト変換 \mathcal{H} の $M. Riesz$ の定理および $Caldwell-Zygmund$ の不等式から、 $p > 1$ のとき

$$H^p(U) = L^p(0, 2\pi), \quad H^p(\mathbb{R}_+^{n+1}) = L^p(\mathbb{R}^n)$$

(ノルム同値) である。

従って次に述べる定理は p_0 対 $p_1 = 1$ のとき意味をもち、

定理 p_i, ρ_i, p_0, ρ_0 は §5 の定理 2 と同様とする。 \mathbb{I} は

$$|\mathbb{I}(f+g)| \leq \kappa (|\mathbb{I}f| + |\mathbb{I}g|)$$

をみたす H^{p_i} から ν -可測関数への写像で

$$\sup_{\sigma>0} \left[\nu \{s \in \mathbb{N} : |\mathbb{I}f(s)| > \sigma\} \right]^{1/\rho_i} \leq M_i \|f\|_{H^{p_i}}$$

($i = 0, 1$) とす。 \mathbb{I} は H^{p_0} から $L^{\rho_0}(\mathbb{N}, \nu)$ への有界写像で、 $\kappa \leq C \kappa^2 M_0^{1-\theta} M_1^\theta$ である。 $\therefore H^p$ は $H^p(U)$ または $H^p(\mathbb{R}_+^{n+1})$ をみたす。

証明は, Marcinkiewicz の補間定理の Zygmund に よる証明法と特異積分の "悪い部分" の評価を組合せて与えられる (Igari [5] 参照).

注意. \mathbb{R} を線型, $\|\mathbb{R}f\|_{L^p_i} \leq M_i \|f\|_{H^p_i}$, $H^p = H^p(U)$, とすれば, 定理の結論は $0 < p_i < \infty$ として成り立つことと知られてゐる (Salem-Zygmund [11], Weiss [18]). しかしその方法は: のよき weak type p は適用できない (Strichartz [17]).

$H^p(U)$, $p > 0$, あるいは $H^p(\mathbb{R}_+^{n+1})$, $p \geq (n-1)/n$, の補間空間が至くは明らかである.

引用文献

[1] A. P. Calderón, Intermediate space and interpolation, the complex method, *Studia Math.*, 24 (1964) 113-190.

[2] S. Campanato, Proprietà di Hölderianità di alcune classi di funzioni, *Ann. Scuole Norm. Sup. Pisa*, 17 (1963), 175-188.

[3] S. Campanato, Proprietà di una famiglia

di spazi funzionali, *ibid.* 18 (1964), 137-160.

[4] S. Campanato, Teoremi di interpolazione per trasformazioni che applicano L^p in $C^{k, \alpha}$, *ibid.* 17 (1964) 345-360.

[5] S. Igari. An extension of the interpolation theorem of Marcinkiewicz, *Proc. Japan Acad.* 38 (1962), 731-734, *Tôhoku Math. J.* 15 (1963) 343-358.

[6] F. John and L. Nirenberg, On functions of bounded mean oscillation, *Comm. Pure Appl. Math.*, 14 (1961), 415-426.

[7] P. Krée, Interpolation d'espaces qui ne sont ni normés, ni complets, *Ann. Inst. Fourier*, 17 (1968), 137-174.

[8] J.-L. Lions, Une construction d'espaces d'interpolation, *C. R. Acad. Sci.*, 251 (1961) 1853-5.

[9] J.-L. Lions et J. Peetre, Sur une classe d'espaces d'interpolation, *Publ. I.H.E.S.*, Paris n° 19 (1964) 5-68.

[10] J. Peetre, Nouvelles propriétés d'espaces d'interpolation, *C. R. Acad. Sci.*, 256 (1963), 54-

55.

[11] R. Salem and A. Zygmund, A convexity theorem, Proc. Nat. Acad. Sci, U.S.A., 34 (1948) 493-7.

[12] S. Spasse, Sur l'interpolation entre les espaces $L^p_{\mathbb{R}}$, Ann. Scuola Norm. Sup. Pisa, 20 (1966) 625-648.

[13] G. Stampacchia, $L^{(p,\lambda)}$ spaces and interpolation, Comm. Pure Appl. Math., 17 (1964) 293-306.

[14] G. Stampacchia, The spaces $L^{(p,\lambda)}$, $N^{(p,\lambda)}$ and interpolation, Ann. Scuola Norm. Sup. Pisa, 19 (1965) 443-462.

[15] E. M. Stein and G. Weiss, Interpolation of operators with change of measures, Trans. Amer. Math. Soc., 87 (1958) 159-192.

[16] E. M. Stein and A. Zygmund, Boundedness of translation invariant operators on Hölder spaces and L^p -spaces, Ann. Math., 85 (1967), 337-347.

[17] R. S. Strichartz, A multiplier version of the Marcinkiewicz interpolation theorem, Proc. Amer. Math. Soc., 21 (1969) 441-4.

[18] G. Weiss, An interpolation theorem for sub-

Linear operations on H^p -spaces, Proc. Amer. Math. Soc.,
8 (1957), 92-9.